

# 生徒の自主性を引き出す教育をベースに 国際バカロレアの理念に基づく授業の開発へ

### — 愛知・県立 旭丘高校 —

生徒の自主・自律の伝統をもつ旭丘高校でも、近年、生徒の受動的な授業態度は課題のひとつ。  
そんななかで立ち上がった、討論会活性化を軸にした地歴・公民科プロジェクトと、  
国際バカロレアの趣旨をふまえた授業の取り組みを紹介する。

取材・文／藤崎雅子

#### 実践のKeyword

🔍 討論会 🔍 読書会 🔍 外部講師による講演会 🔍 国際バカロレア  
🔍 倫理 🔍 総合的な学習の時間 🔍 現代文 🔍 思考力

**聞きわけの良い生徒が増加  
考えや意見に物足りなさも**

愛知県立旭丘高校は全人教育をモットーとする進学校だ。生徒会主催の新入生ガイダンスで先輩から後輩へと伝えられる自主・自律の精神は、生徒主体の学校行事のなかで育まれていく。生徒主導による服装の自由化、生徒会が授業に対する生徒の意見を集約して個々の教員に届ける「意見制」の導入など、生徒が自律的に学校を動かしてきた歴史をもつ。

同校生徒について、教頭の服部俊之先生は「高い学力をもち将来的にはリーダーとしての活躍が期待されている」という。しかし最近では、「聞きわけの良い、いい子になりつつある」「意見がいえぬ」といった声も教員からあがるようになっていた。

そんな生徒の変化への対策として、同校が取り組んでいる2つの挑戦を紹介したい。1つは伝統行事である討論会の活性化を軸にした地歴・公民科のプロジェクト。討論会など特別活動での生徒の動きを生かして、地歴・公民科の授業でも討論や論述を取り入れている。もう1つは国際バカロレア（IB）の授業の研究。IBの考え方に基づく、学習者中心の授業づくりが進められている。

**特別活動を共通テーマで  
関連づけ、活性化**

まず、11年度に県立学校の意欲的な教

育活動を支援する県のアクティブチャレンジ事業、魅力ある授業づくり部門に採択された、地歴・公民科のプロジェクトから紹介しよう。これは地歴・公民科の授業を特別活動と関連させ、主体的な学びにより、豊かな思考力と表現力、発信力を育成しようというもの。プロジェクトの核となっているのは、伝統行事である学校祭討論会だ。

討論会は、秋に6日間の日程で開かれる学校祭の主要企画の1つ。実行委員会の生徒がテーマ設定から企画・準備を行い、当日は生徒の司会進行により、会場の参加生徒600〜700人も交えて2時間半の討論を行う。しかし近年は、話が堂々巡りしたり、中身が深まらなかつたりと十分な討論ができず、地歴・公民科の服部誠先生は課題を感じていた。

「討論会は生徒が社会的な問題に対しての知識、思考力、判断力、表現力を磨く絶好の機会。教員からは討論会廃止の声も出ていましたが、改善の方向で立ち上がりました」

そう話す服部誠先生は、討論が低調な理由に知識の不足があると考えた。そこで、服部誠先生が担当する図書委員会が企画する2つの行事（いずれも自由参加）—— 文芸作品を読んで感想を討議する「読書会」と、同校卒業生を招いて講演してもらおう「教養講座」を、討論会のテーマに合わせるように働きかけることで、事前に知識を深められるようにした。

さらに県のアクティブチャレンジ事業採択で資金を得たことにより、新たな活動



### School Data

1877年創立／普通科・美術科  
 生徒数 1088人(男子576人・女子512人)  
 進路状況(2012年度実績) 国公立大学40%  
 ※全体の進路状況未集計  
 名古屋市東区出来町3-6-15  
 TEL 052-721-5351  
 URL <http://www.asahigaoka-h.aichi-c.ed.jp/>

### Outline

愛知県下で有数の進学校。前身である旧制愛知県第一中学校以来の伝統を受け継ぎ、自主・自律の精神に充ちた心豊かな生徒を育成する全人的完成教育を目指している。私服登校が黙認されているなど自由な校風。2011～13年度愛知県教育委員会「県立学校アクティブチャレンジ事業(魅力ある授業づくり部門)」、12～14年度文科省「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」の指定校。

も可能に。希望者によるテーマに関した遠方への巡検(フィールドワーク)、学んだことを実際に行動に移す「提言の実践」、そうした1年間の活動内容を生徒がまとめて「旭丘からの提言」として発行することも始めた(図1)。

### 教員が手出しをしなくても生徒は自ら動き出した

プロジェクト初年度となる11年度から、生徒の動きは大きく変わった。討論会に関する一連の活動の企画・運営は、討論会実行委員会、図書委員会の読書会班および教養講座班の生徒が連携してあたるようになったが、彼らを中心に目覚ましい動きがみられたという。

11年度のテーマは、TPP問題で話題となった「農業」だ。同校OBの名古屋大学教授による農業に関する著書を取り上げた読書会では、討論会実行委員と図書委員が連携して発表と討論をうまくリード。その著者を招いた7月の教養講座では、生徒から次々と質問が出て、定刻を2時間過ぎるほど盛り上がった。

また、教員がセットした巡検は、中山間地の農村の実態を知るための岐阜県旧徳山村訪問の1回のみだったが、委員の生徒が新たな巡検を企画。委員らは夏休みと休日を利用して、大規模農業の現場、過疎化する農村、道の駅など長野県まで足を延ばした。その知識と経験が集約された討論会では、活発な意見交換ができた。

図1 地歴・公民科のプロジェクトの流れ

月	活動	参加	2012年度の内容
4月	討論会実行委員会発足	委員	討論会実行委員会、図書委員会(読書会班、教養講座班)、提言編集委員会を組織
5月	企画会議スタート	委員	本年度のテーマ「21世紀の人権問題—外国人労働者との共生を考える—」の中で具体的に取り組む4つの小テーマを設定
6月	読書会	全体(希望者)	「外国人労働者新時代」(井口泰)を選定
7月	教養講座	全体(希望者)	関西学院大学・大学院の井口泰教授による講演 議題「外国人政策の改革と日本の未来—緊急課題と長期展望—」
	座談会(3回)	全体(希望者)	1回1テーマ(①研修生制度 ②日系ブラジル人 ③外国人介護士)について知識の共有と意見交換
7月～9月	巡検(2回)	全体(希望者)	①大阪(人権博物館、コリアンタウン) ②外国人労働者を支援するNPOまなびや@KYUBAN
	学校祭分科会	全体(希望者)	武蔵大学アンジェロ・イシ教授による講演 議題「日系ブラジル人の視点から考える人権と多文化共生」
9月	学校祭討論会	全体(希望者)	「21世紀の人権問題—外国人労働者との共生を考える—」をテーマに討論
	提言の実践	委員	文化祭でブラジル料理とマテ茶の販売
10～2月	生徒による研究紀要「旭丘からの提言」の作成	委員	提言編集委員会が原稿作成(全35ページ)

「さまざまな立場で農業に関わる人たちの話を聞いたことで、討論会では自信をもつて意見を述べられたようです。この数年間で最もまとまった討論会となりました。また、巡検で農産物加工・販売の成功例である『すんぎ』という漬物を知ったことで、すんぎ試食会開催につながりました」(服部誠先生)

なぜ生徒の動きが変わったか。その理由は、複数の行事の関連づけにより連続した動きになったこと、1テーマに深く取り組めたこと、アクティブチャレンジ事業に採択

されたことでモチベーションが高まったことなどが考えられる。

なかでも効果が大きかったのは、教員の間わり方のような。一連の活動のなかで教員が意識したのは「生徒が主体となること」だという。テーマ設定では、生徒から突飛なテーマが出てきても教員は「否定的に否定せず、良い点と悪い点をあげて考える材料を提供。討論会の流れを固めていく過程では、教員がビジョンの全てを示さずに生徒が考えた。『旭丘からの提言』作成においても、教員は構成や文章への指示はし



学校祭 討論会では司会進行やパネリストの生徒だけでなく、会場の生徒も発言する



在日外国人をテーマにした12年度の巡検では、外国人支援を行うNPOを訪問し、在日ブラジル人と意見交換



読書会では、取り上げる書籍の章ごとに、委員によるレクチャーと参加者同士の話し合いを繰り返す

図2 『旭丘からの提言』より生徒の感想(抜粋)

もちろん所詮は大した知識ももってなかった一介の高校生が、半年間ばかりの勉強を基に考察したものであり、さまざまな不備があることは重々承知している。しかしながら、身の回りに山積している問題について、自らの頭で真剣に考えることに意義があると思う、また実際、私たちは自らもち得る限りの力をもって、「農業」というテーマに向き合ったという自負がある。これがきっかけとなって世の中がほんの少しでも良い方向に動いたなら、もう何も言うことはない。  
-2011年度討論会実行委員長・羽柴聡一朗さん(当時2年)

たくさんの知識を得て長時間にわたる討論会を行った後も、私たちには移民や外国人参政権の問題など、答えが出せなかった事柄が多く残されたままです。今、問題になっている「TPP参加の是非」や「原発廃絶の是非」、「いじめをいかに解決するか」なども答えは簡単には出せません。しかし、私たちが今すぐに完璧な答えを見つけられないことは、決して恥じることではないと思えました。こうした問題に興味を持ち、本を読み、話を聞き、自分の目で見て互いに意見を交わしたことに意義があります。私たちは一回り大きく視野を広げ、自分の価値観をもつことができるようになりました。  
-2012年度討論会実行委員会・山田洸大さん(当時2年)

「生徒が出す斬新な発想に対して、教員側はそれらをふくらませるアドバイスをし、生徒がそれを完成させるという流れ。私たちが生徒に教えてもらうことも多かつた気がします(服部誠先生)」  
討論会などの活性化は、委員を務める生徒だけによるものではない。プロジェクトにより、自由参加である読書会や教養講座への参加者は増加。討論会では会場の一般参加者からも活発な意見が出た。「自分たちで勉強して堂々と発言している仲間」の姿が他の生徒への刺激となっている

と服部誠先生。一部の生徒の動きが、学校全体へ波及したといえる。

授業のなかにも 討論や論述を導入

昨年度は「外国人労働者」をテーマに設定。農業や工業の現場における外国人の研修生制度、日系ブラジル人、外国人介護士などの諸問題に取り組み、各活動は前年同様に盛り上がった。今年度は、日中および日韓で軋轢が生じている「歴史認識」をテーマに進めているところだ。  
また、プロジェクトの環として、地歴・公民科では授業に討論や論述を導入。実施回数や方法は各教員に任されるが、例えば服部誠先生は討論会開催後の授業で、学習内容に関連した討論会を実施。事前にアンケート調査や作文も行い、学校祭の討論会での経験をふまえながら討論に挑戦させるという。

こうした受験勉強以外の活動は、進路実現のためにはマイナスになるという意見もあるだろう。しかし、11年度に各委員の中心メンバーだった4人のうち、3人が今春、第2志望の東京大学に進学。知識習得だけを求めない教育の方向性に、同校は自信を深めている。

現行科目内で国際バカロレアの カリキュラム開発に挑戦

もう一つ取り組んでいるのは、社会で求

められているグローバル人材の育成に向けた、国際バカロレア(IB)の趣旨をふまえた教育の研究だ。同校は12年度、文科省が「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」事業に指定した高校5校のうちの1校である。

IBは世界各国でインターナショナルスクール中心に採用されている教育プログラムだ。年齢に応じた3つのプログラム(図3)のうちのディプロマプログラム(DP)課程を修了し、統一試験に合格すると得られるディプロマは、世界で多くの大学の受験資格や入学資格として認められている。その教育理念は全人教育にあり、具体的な目標として10の学習者像が示されている(図4)。これは、知徳体のバランスのとれた力である「生きる力」の育成を理念とする新学習指導要領とも方向性を同じくする面があり、同校が伝統的に掲げてきた全人教育とも共通点がある。生徒の大半が国内大学への進学を希望する同校では、IB認定校になることより、方向が似ているIBの教育方法を授業に取り入れることが第一のねらいだ。

「近年は学力観が知識中心に偏りがちな傾向が課題となるなか、公立高校という枠の中でどうIBの手法を取り入れていくかを探るために取り組んでいます(服部教頭)」  
昨秋に指定を受けて以来、基礎的な情報収集、IB認定校の訪問調査やワークショップ参加、校内の共通理解を図ってきた。今年度は実践スタートの年として、4人の教員がそれぞれ担当する、2学年の2クラス

スの授業において実践を始めたところだ。

「考える」に焦点を当て 3科目が連携した授業がスタート

DPでは6つのグループで構成される学習とともに、EIE(課題論文)、TOK(知識の理論、CAS(創造性・活動奉仕)の3つを履修する(図5)。同校のメインテーマは、このなかのTOKの趣旨を踏まえたカリキュラム開発だ(図6)。TOKは国際的に通用する批判的・多角的な思考力やコミュニケーション能力を育むためのもの。通常100時間のTOKのプログラムを現行の教科科目にそのままあてはめることはできないので、同校ではそのエッセンスを倫理・総合的な学習の時間、現代文に取り入れるかたちで進めている。加えて数学においても、IBの統一試験で利用されるグラフ電卓を用い、思考力を重視した授業に取り組む。

TOKでは「生徒の思考・疑問」が学習の核になる。その特徴をふまえて今年度、3科目が共通して掲げるテーマは「考える」ということだ。その中心を担う倫理を担当する森也寸司先生は、改めて学習指導要領を熟読し、教科・科目の目的に立ち返りながら授業内容を検討。テーマのねらいについてこう話す。

「最近の生徒の論文や意見文には『私はいこう思う』と『こうしてもらいたい』という表現が多く、気になっていました。これらに共通するのは、自分が主体となり、深く思索した結果ではないということ。これまで



地歴・公民科  
森 也寸司先生



図書部、地歴・公民科  
服部 誠先生



英語科  
黒川千鶴子先生



教頭  
服部俊之先生



教頭  
城ヶ谷和広先生

#### 図4 国際バカロレアの学習者像

Inquirers	探究する人
Knowledgeable	知識のある人
Thinkers	考える人
Communicators	コミュニケーションできる人
Principled	信念のある人
Open-minded	心を開く人
Caring	思いやりのある人
Risk-takers	挑戦する人
Balanced	バランスのとれた人
Reflective	振り返りができる人

#### 図3 国際バカロレアの3つのカリキュラム

<b>PYP</b> (Primary Years Programme : 初等教育プログラム): 3~12歳対象
<b>MYP</b> (Middle Years Programme : 中等教育プログラム): 11~16歳対象
<b>DP</b> (Diploma Programme : ディプロマプログラム): 16~19歳対象

#### 図5 DPのカリキュラム

DPのカリキュラムは、表の6つのグループにより構成される。ディプロマ資格を取得するためには、上級レベル又は標準レベルとして、グループ1から5までの科目を各々1つずつ選択し、さらにグループ6から芸術またはグループ1からグループ5の中からもう1科目選んで合計6科目を2年間履修する。

グループ名	科目	グループ名	科目
グループ1	第1言語(母語)	グループ4	実験科学
グループ2	第2言語(外国語)	グループ5	数学とコンピュータ科学
グループ3	個人と社会	グループ6	芸術または選択科目

それに加え、ディプロマ取得のためには以下の3つの要件を満たす必要がある

- **Extended Essay (EE)** : 課題論文  
生徒が学んでいる科目に関連した研究課題を決めて、自分で調査・研究を行い、学術論文にまとめる。
- **Theory of Knowledge (TOK)** : 知識の理論  
学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味して、理性的な考え方や客観的精神を養う。さらに、言語・文化・伝統の多様性を認識し国際理解を踏まえて、偏見や偏狭な考え方をただし、論理的思考力を育成する。
- **Creativity/Action/Service (CAS)** : 創造性・活動・奉仕  
教室を出て広い社会で経験を積み、いろいろな人と共同作業することにより協調性、思いやり、実践の大切さを学ぶ。  
DPは授業、試験ともに英語、フランス語、スペイン語のいずれかで行われるのが基本である(一部では、試験的に中国語とドイツ語でも行われている)。

図3~5出典: 文部科学省Webサイト(一部編集部まとめ)

#### 図6 旭丘高校での「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する研究」授業概要

授業	概要
2年倫理	生徒が「自分はどうすべきか」や「なぜそうすべきなのか」を多方面・多角的に考えられるような授業を目指す。その際、「そもそも自分は何を大切にしているのか」という自分の持っている価値観を知ることや、「一般に言われていることが本当に妥当なものか」というように、常識や前例などが人間らしく自分らしく生きることにつながるかなどについて、自分や他者に問いつつ、根本的・批判的な視点で検討する。そのための材料として先哲の思想を用いる。さらに、現代社会が抱える諸課題の中から具体的課題を設定し、それについて探究していく予定。
2年総合的な学習の時間	ケンブリッジ版TOKの教科書のactivity、説明を英語で読み、基本的TOK用語を英語で学習する。さらに、「Skills for Better Writing」を用いて、英語での小論文を書くことを目指し、表現方法を学習する。
2年現代文	TOKのダイアグラムのうち、特に「知るための方法(Ways of knowing)の獲得を目指す。言語に関する指導を、より強く意識した授業展開を工夫する。より深く考えるための「方法学」(問題のたて方、整理のしかた、因果のみつけ方など)指導を中心に、各教材で、倫理、総合的な学習の時間と関連させた内容を取り上げ、「発問-応答」中心の授業を心がける。

生徒に「考えるとはどういうことか」を考  
えさせていなかったことが「因でしよう。そ  
こで、『考える』とはどういうことか『思っ  
とはどう違うのか、じっくり取り組んでい  
きます』  
総合的な学習の時間では、「考える」を  
念頭におきつつ、TOKの評価の1つである  
課題エッセイを見据え、英語で論理的な文  
章を書くことを目指す。英語の演習を兼  
ねてTOKの教科書を読ませたり、グルー  
プワークや英文エッセイの練習などを行っ  
ていく予定だ。

「知識とは何かを考え、自分の意見を述べ  
たり、しっかり討論ができるようにするた  
めの下地をつくりたいと考えています」(英  
語科・黒川千鶴子先生)  
また、将来的にDPにおいて日本語の使  
用が認められることを前提に、現代文でも  
TOKに取り組んでいる。日常生活や学習  
のなかで感じた疑問について、視野を広げ  
て思考、探究し、他者へ論理的に伝える方  
法論を教える。  
「基本的な教材や授業の進行は変わりま  
せんが、IBで大切にされている知識の相互

関連や統合を意識してゆきます。授業の  
中で生徒が他教科とのつながりを意識で  
きるようにすることや、生徒からの発問を  
促すように取り組んでいきたいですね」(国  
語科・村上広美先生)  
今年度も多くの研修を並行して行いな  
がら、内容を模索していく予定だ。  
「生徒が主体となる授業とは何か。調査  
や発表をさせれば『活動の主体』にはなり  
ませんが、認識が変わらない限りは講義型授  
業とあまり差がありません。生徒が自ら知  
識や理解をつかみとりにいく、『認識の主

体」という視点も必要です。活動と認識の  
両方の要素を授業に取り込む方法を探っ  
ていきたいと思えます」(森先生)  
●  
環境の設定やきっかけの与え方で生徒  
の意識や行動が大きく変わることは、すで  
に地歴・公民科プロジェクトで証明済みだ。  
「生徒はもともと考える力や表現する力  
をもっている」と服部教頭。その力をどこ  
まで伸ばせるか、教員の果たす役割は大き  
い。今後、IBの授業が進むと生徒はどう変  
化していくのか、注目していきたい。